

朝日新聞社

渡辺 元史 様

玉置 太郎 様

インクルーシブ教育に関する取材を求める要請書

私たち「障害児を普通学校へ・全国連絡会」は、「障害があっても地域の学校に行きたい」という親子の声に答えて、1981年に「障害児が普通学校に行けるように」を共通の願いとして出発しました。地域の普通学級で共に学ぶことを願って、全国から保護者をはじめ障害者・教師・保育士・医師・弁護士など多くの方が参加しています。以来40年にわたって「障害のある子もない子も共に学びあう学校教育」をめざして会員相互のネットワークを作り、社会にアピールしています。かつては私たちの会の活動が貴紙にも取り上げられていました。ところが最近は、「障害のある子もない子も共に学びあう学校教育」をめざした報道になっていないと気になっています。

2020年8月24日 朝日新聞朝刊1面で、「特別支援学校 開校相次ぐ 深刻な教室不足背景」と報じられました。貴紙は、この間こうした内容の記事を掲載しています。2009年4月26日の朝刊1面でも「特別支援学校生、急増 教員・教室足らず 障害のある子どもが通う特別支援学校の児童生徒が全国で増え続けている…」と報じました。また2017年4月30日朝刊1面でも「3400教室足りない支援学校 障害が比較的重い子どもが通う特別支援学校で深刻な教室不足が続き…」と報じました。

私たちは、児童生徒の総数が減少しているのに特別支援学校の児童生徒が増え支援学校が足りないのは、子どもたちを能力で分ける選別教育が進められ、普通学級から学習に遅れのある子や様々な問題を抱えている子、障害のある子が支援学級・学校に追いやられているからだと捉えています。事実私たちの会には、親や本人の希望する普通学級ではなく支援学級や学校への就学を強制されているという相談が増え続けています。特別支援学校の児童生徒が増え深刻な教室不足が生じていることは、インクルーシブ教育に逆行しています。足りないのは、特別支援学校の教室ではなく、普通学級での共に学ぶための合理的配慮だと考えています。

たとえ生活のために何らかの訓練などの手立てが必要な場合でも、学校でそれをしなければならぬものでしょうか。また特別の施設を設けてそこに集めてしまうと、子どもたち同士が育ち合う機会が奪われてしまいます。他の子どもたちも行く同じ場（病院や保健施設など）でその手立てを行う工夫をすることが「合理的配慮」であるはずで、親子と関係機関の間で話し合われて行われるべきことです。

障害のある人もない人も共に暮らす社会は、障害のある子もない子も共に学ぶ学校からつくられていきます。特別支援学級・学校の卒業生のほとんどが福祉施設利用者になり、就労してもなかなか働き続けられない状況があります。大人になってから一緒に暮らしたり働いたりすることは障害のある人ない人双方にとってむずかしく、共生社会に向かっていきません。

インクルーシブ教育は、日本も批准した国連障害者権利条約にもうたわれています。文科省は「多様な学びの場に子どもたちを分ける」教育をインクルーシブ教育システムと言っていますが、この「インクルーシブ教育システム」と障害者権利条約のインクルーシブ教育とは違います。私たちは、国連障害者権利委員会にパラレルレポートを提出し、障害のある子が普通学級から分断される現状を訴えています。また衆議院・参議院議長に向けて「共に生きる社会をめざして 障害者権利条約が規定するインクルーシブ教育の実現を求める請願」の署名活動も行っています

以下、この立場から、8月24日の貴社の記事について、私たちの意見を述べ、インクルーシブ教育の現状について取材をしていただくことを要請します。

記

- 1 「専門的な支援教育を望む保護者が増えたことなどで、支援学校に通う子どもはここ10年で約2割増加」とありますが、保護者は、「早期発見・早期療育」で特別支援教育のみを指導され、普通学級で学ぶ情報がほとんどないのが現状です。
- 2 「国は障害がある子どもとない子どもが共に学ぶ『インクルーシブ教育』を進めようと、13年に学校教育法の施行令を改正し、通常校か、支援学校か、子どもの就学先を決める際に保護者の意見が反映されるようにした。」とありますが、普通学級を希望する保護者の意向は必ずしも尊重されていません。川崎市の就学裁判がその例です。
- 3 「17年の調査では、どちらにも入学できる障害の重さと判断された約1万人」とありますが、「どちらにも入学できる障害の重さ」とはどこにこの記述があるのでしょうか。出典を教えてください。
- 4 子どもは子どもの中で響き合いながら育ちます。「特別支援学級に見学に行った子が教師と遊んで、楽しかった。」といった文がありましたが、通常学級には見学(体験)に行かれたのでしょうか。そもそもそのお子さんは本来なら一緒に通うであろう同じ地域の同じ世代の子どもたちと育ち合っていたのでしょうか。「学校 泣くほど楽しいわ」

これは、私たちの会に届いた今年4月に小学1年生（普通学級）になった金沢市の障害のある子どもの声です。インクルーシブ教育を進めるために、普通学級で学ぶ子どもたち取材してください。

- 5 記事の最後に普通学級の問題にも触れていますが、だから特別支援学校の希望者が増えるのはやむを得ないとするのであれば、障害者権利条約が規定するインクルーシブ教育に反すると思います。権利条約批准後、どこまで通常学級での受け入れが進み試行錯誤がされているか、受け入れの情報が広く知らされていない状況など報道本来の役割を果たすことを期待します。そのための情報提供も含め、私たちの会への取材も求めます。

上記の疑問、懸念、要望に真摯に応じて頂けるよう重ねて要請します。

以上

2020年10月2日

障害児を普通学校へ・全国連絡会

代表 長谷川 律子

東京都世田谷区南烏山6-8-7 楽多ビル3F

Tel 03-5313-7832 Fax 03-5313-8052

info@zenkokuren.com

<http://www.zenkokuren.com>